



# 館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月20日(土)

発行 館長 加藤智一

## 大象無形（たいしょむけい）



東北は山形の、とある山里。冬の雪が溶け、春の息吹が谷を満たす頃、一人の若者が村の外れに住む老僧を訪ねました。若者は町で学問を修めていましたが、心の奥に満たされぬ空虚を抱えていました。

「師よ、私は多くの書を読

み、知識を積みました。しかし、真理とは何かと問われると、言葉が出てこないのです。」老僧は囲炉裏の火を見つめながら微笑みました。「それは当然だ、真理は言葉に尽くせぬものだからな。老子曰く『大象無形』。最も大きなものは、形を持たぬのだ。」若者は首をかしげました。「形がないものが、どうして形だと言えるのですか？」僧は庭に出て、雪解け水が流れる小川を指さした。「水を見よ。器に入れれば器の形を取り、谷に流れれば谷の形を取る。だが水そのものには形がない。だからこそ、あらゆる形を生み出せるのだ。」若者はしばし沈黙しました。僧はさらに続けます。「宇宙も同じだ。人は星を数え、地図を描こうとするが、宇宙そのものを輪郭づけることはできぬ。あまりに大きすぎるからだ。老子はそれを『大象無形』と呼んだ。真理や徳もまた、数値や図式では捉えられぬ。むしろ形を超えたところにある。」

そう言うと僧は、机の引き出しから古い印を取り出しました。そこには「大象無形」と刻まれていました。「これは清代の書家・呉昌碩の篆刻だ。彼は老子の言葉を好み、石に刻んだ。形を持たぬものを、あえて形に刻む。その矛盾こそが芸術の妙だ。書や篆刻は、形を超えた精神を伝えるための器なのだ。」若者は印を取り、指でなぞります。「形を持たぬ

ものを形にする。それはまるで、詩が言葉を超えて心に響くようですね。」僧はうなずいて言いました。

「その通り。大音希声、大象無形。本当に大きなものは、かえって耳に届かず、目に見えぬ。だが人の心には深く響くのだ。」

若者はさらに老僧に尋ねました。「師よ、では現代において『大象無形』とは何を意味するのでしょうか？」僧は少し考え、答えました。「今の世は、何でも形にしたがる。数字で測り、図式で示し、ランキングで比べる。だが愛や信頼、安心感といったものは形にできぬ。むしろ形がないからこそ、本物であり、大きな力を持つのだ。」若者は深くうなずきました。「なるほど、形にできぬものこそ、最も大きな形なのですね。」僧は笑みを浮かべながら言いました。

「その理解こそが、道に近づく一歩だ。『大器晚成』という言葉もある。大きな器は完成に時間がかかる。真理を悟るのも同じだ。急ぐな、焦るな。やがて形なきものの中に、形を見出すだろう。」

数年後、若者は再び師を訪ねました。今度は彼の目に迷いはなく、静かな光が宿っていました。「師よ、私は旅をし、多くの人と出会いました。笑いも涙も、すべてが形を持たぬものに支えられていたと気づきました。友情も愛も、形はない。だが確かに存在する。これこそ『大象無形』なのですね。」老僧は満足げにうなずきました。「その悟りを得たなら、もう私のものとに来る必要はない。道は形なきもの。だが歩む者の心に、確かに形を刻むのだ。」若者は深く礼をし、山里を後にしました。春の風が彼の背を押し、形なき大なるものが、静かに彼を包んでいました。

